

言語についての一考察

その ②

大 森 孝

序

前号「棲神」に於て、言語の種々相について、述べた次第ですが、本号に於ても、それ等について、引き続き筆者なりに述べて見たいと思う。

A、言語の変化について

言語が変化する事は、一般によく知られている。新語が現われて、古語が、すたれたり、文体が変わったり、又、発音が、変化したりする。

言語が、情報伝達の符号体系だとすると、言語の変化は、その機能を、十分果たす事が出来なくなる。即ち、言語の変化は、言語自体の本質と、矛盾したものとなる。しかしながら、言語は、変化しているのであり、一定不変ではない。言語の変化は、ゆっくりと起るものであり、急に1つの語が、すっかり変ると云う事は、あり得ない。又意味の変化は、徐々に起り、初めは、文体上のニュアンスであったりする。

言語の表現される内容が変れば、言語も自然に変わって来るものであり、新しい概念は、新しい語を必要とし、又、音体系も、変わって来る。

結局、言語の変化は、歴史の流れを示す社会、文化、社会的階級関係、思考法、信念、評価等の変化の、自然で、必然的な結果となる。言語変化を充分理解するためには、社会や、文化が共につくられてゆくすべての構造や、この構造の中で、生じている変化と、関連づけて、言語の変化を観

察しなければならない。

B, 言語の起源について

人間と動物を区別する色々の特性の中で、最も重要なものは、言語能力である。人間の先祖が、成し遂げた知的発達、決定的な基礎である言語の起源を解明する事は、至難とされている。

動物の声と、人間の話し言葉の間には、大きな隔りがある。原始的な民族の言葉に注意を向け、そこに、言語の起源を見つけようと試みられたが実際には、相当発達した言語体系を、見つける丈けであった。終に、子供の話し言葉より、結論を出そうとしたが、これは、言語の習得法が、明らかになる丈けで、言語の本質的起源の探求とは、遠いものであった。言語の起源については、その解明は、前述した様に、一般に、悲観的である。しかし、コミュニケーションや、言語の構造の問題に取り組んでいる新しい傾向の、言語学者の中には、起源の解明に取り組んでいる少数の学者が居る。その中に、デンマークの偉大な言語学者の、オットー・イエスベルセン (Otto Jespersen) (1860—1943) が居る。彼は、多数の言語を比較し、どの言語にも、多くの変化性や、複雑性を、そなえた言語段階から、異なる部分が次第に、別々の要素に分けられていく段階へと、発達するのを確かめられると思った。彼によると、現代英語に、語形変化が少ないのは、抽象受容力、分析受容力が、多くの語形変化をもつ古代ギリシャ語、ローマ語より、大きいと云う事を示す事になる。彼は、この事より、最も古い言語段階の特色は、より少ない抽象力や、分析力にあると考えた。即ち、人間の話し言葉の最初の表明は、一定の或る意味をもつ具体的情況に於て発せられた分化していない、音的に複雑なものであると解した。

他に、オランダの言語学者、ヴァン・ヒネケン (Van Ginne Ken) が

居る。彼は、イエスベルセンの様に、言語発達の跡をたどり、現代言語の未発達な特性と、新しい特性を、区別出来ると思った。彼は、母音をもつ言語は、子音丈けの、或は多くの子音をもつ言語に比べて、発達した段階にあると主張した。彼は、人間が全然、言葉や、言語音によらず、身振りや絵文字丈けで表現した時期を、言語発達の最もプリミティブな段階としている。彼は、太古の人たちの身振りとして保存されている最も古い絵文字との一致も、いちじるしい、と云っている。彼の説によると、発音器官で調音する話し言葉は、人間の言語発達の、後の段階として現われ、前に発達した表現手段の補足として、出来上った事になる。又、彼によると初めに調音された音は、複雑な舌打ち音で、これは何等かの感情音と思われ、これは、間投詞のような機能を果たし、後になって、特定な客観的概念や、気持ちに結びつき、言語記号の特性をもつ様になった。と云っている。重要な事は、前号「棲神」に於て述べた様に、点字や、信号、各種の合図体系が、慣習的記号から成り立ち、言語社会をつくる人の集団の中で用いられる事である。こうした記号は、その集団成員が、望む表現や、概念を象徴化する。

次に、ハンガリーの研究者レーヴェス (G. Révész) の説について述べると、彼の説明全体に一貫して見られる思想は、言語の社会的特色についてである。彼は、人間の接触欲 (人間の原始的本能) の中に、言語の起源を求めたのである。彼によると、真の言語の最もプリミティブな形式、即ち、彼の名づけている命令的言語は、呼びかけから発達した事になる。命令法即ち、或る事をするように周囲の人たちへの命令や、頼みが、話し言葉の最初の形式であると云う。彼は他に命令したい欲求は、事実を伝達したい欲求より、原始的である。と述べている。

以上の彼の説について考えて見ると、プリミティブな呼びかけ、つまり

接触しようと、思わず出来た分析出来ない様な、泣きわめき声が、言語として、形式づけられた命令へ発達するのは、どう云う過程を経るのであろうか。幼児について考えて見ると、物を取ろうと手を伸ばしたり、周囲の人達に自分の希望に答えさせ、かなえるように、ぐずつく子供は、所属する社会に受け入れられている言語体系を、未だ用いない。呼びかけは、未分化の音複合体からなり、直の言語の前段階であり、呼びかけの用いられる状況から¹ はじめて、意味内容も、はっきりして来る。他の音複合体は他の内容をもつ事になる。こうして、分化した音は、一定の集団の人々、1種類、1地域に普及し、最初の音素間の対立も、明確になって来る。こうして、プリミティブな未分化の呼びかけから、次第に、表現手段の慣習的体系が出来上り、その意味内容も、地域ごとに異なって来る。そして、地域的に特徴ある言語体系が、出来上って来るのである。

他に、言語の起源について研究した者に、ドイツ、ロマン主義の思想家ヘルダー (T.G. Herder) が居る。彼は、言語を人間の本質に備わったものとして、理性の問題として考えている。

C、言語の類別について

一般に、世界の言語の類は、2,700から2,800位とされている。こうした多くの言語の中で、少数(約12位)が世界の人々により、話されている。

アメリカに居る種族の間では、世界の言語の、1,200より少なくない(約半数)言語が、話されているが、それ等を話す人数は、数千人、又は、数百人位であると云われている。

又、アフリカでは、500位の言語が話されているが、やはり、それを話す種族は、極めて少数である。

又、オーストラリア、ニューギニア等、太平洋の島々の、現地人の間で

は、約 500 位の言語が、話されている。

更に、アジアの小さな種族の間では、数百の言語が、話されている。

国際的立場で考えれば、小さな集団が、大きな範囲で話される言葉を、話すようになる事は、よい事であると思う。例えば、ラップ語を話す集団がスウェーデン語、フィンランド語、ロシア語を、話すようになったり、アメリカインディアンが、スペイン語、或は英語を話すようになったり、身近で述べれば、アイヌ人が日本語を話したり、用いたりする様になった時、はるかに大きい文化的、社会的に進んだ共同社会に、加わる事になる。しかし、1つの言語が、消える事は、少なくとも、何がしかの、独自性のあった思想形式や、文化形式が、失われる事になる。

言語は、前に述べた様に、社会慣習や、行動形式の体系である。2つの言語が、全く同じ、共時的状態から発達した事が、示されれば、近親関係になる。こうした共時的状態は、保存されている文書や、言語史を比較する方法によって、知ったりする。こうした調査により、スカンジナビア語は、共通の北欧祖語、凡てのゲルマン語は、共通のゲルマン祖語をもつ事が、証明される。

インド・ヨーロッパ祖語の体系が、あらゆる点で、整然と設定されているとは云えないが、一応次の様に類別する事が出来る。即、インド・ヨーロッパ語族の、最も主要な現代語を類別すると、次の表になる。

1. インド・イラン語：インド語（古インド語：ヴェーダ語、サンスクリット語）

イラン語（東部語派：アフガン語、バミール語、
西部語派：ペルシャ語、クルド語）

2. アルメニア語

3. アルバニア語

4. スラバ・バルト語：スラブ語（ロシア語、ブルガリア語、セルボ・クロアチア語、スロヴェニア語、チェ

ック語、スロヴァキア語、ポーランド語)

：バルト語(リトアニア語、レット語)

5. ゲルマン語：北部ゲルマン語(デンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語、フェーロー語、アイスランド語)

：西部ゲルマン語(英語、フリジア語、オランダ語、低地高地ドイツ語)

6. ケルト語：ブルトン語、アイルランド語、キムリ語、スコットランド語、マンクス語

7. イタリア語：ラテン語とその姉妹語：フランス語、プロヴァンス語、カタロニア語、スペイン語、ポルトガル語、レート・ロマンス語、イタリア語、サルディーニア語、ルーマニア語

8. ギリシャ語

次に、主要な語族について、表にすると、次の様にル。

1. インド・ヨーロッパ語族(上の表参照)

2. ウラル語族：サモイェード語派、
フィン・ウグリック語派(フィンランド語、エストニア語、ラップ語、ハンガリー語)

3. コーカサス諸語

4. ハム・セム語族：セム語派(ヘブライ語、アラビア語)
ハム語派(バーバル語)

5. スーダン諸語

6. バンツー語

7. ホッテントット語、ブッシュマン語

8. アルタイ語族：トルコ語派、モンゴル語派、ツングース語派

9. 日本語

10. 古シベリア語族：ユーカイール語派、チュクチョ・カムチャグル語派

11. インド・シナ語派：シャム・シナ語派、チベット・ビルマ語派

12. アンダマンネシアン語族

13. ドラビタ語

14. オーストロ・アジア語族：マラッカ語派、マンダ語派

15. マライ・ポリネシア語
16. オーストラリア諸語
17. バスク語
18. 朝鮮語
19. エスキモー語
20. インディアン語：アルゴンキアン語，イロケシア語，スー語，ウート
アデスク語，マヤ語，カリブ語，アロバク語，ツ
ビー語，グワラニー語，ケチュア語（インカの言語）
アローケニア語

D, 科学的言語の発達について

専門的な仕事をする人は、専門語を発達させる。即ち、言語を短縮化しその反応を、正確なものにする。ある程度の大きさをもつ言語社会には、方言の区分が生じやすいが、その原因は、この様な専門語を使うところより来ている。科学的言語は、科学的観察の、必要度に応じて、益々増大する傾向がある。こうして、ヨーロッパや、アメリカの科学者達は、ラテン語や、古代ギリシヤ語から、新語を、製造して来たのである。

科学の世界では、反応が、正確を必要とし、又、推論も、注意深く、又複雑になる必要がある。したがって、そこで使われる言語は、非常に用心深い文体となる。後になって人々は、少数の文字を、簡単な方法で並べたものを、目で見、図解式に取り扱うことによって、迅速かつ正確に、推論を行なうようになった。こうして、科学的論述が、導かれて来る。この科学的論述は、形式的論述と、非形式的論述に区別出来る。形式的論述とは厳重に制限された言語と、統語構造により成立する。更に、これは数学的論述と、記号論理学に大別される。数学的論述は、応用数学と、純正数学の論述に別けられる。

記号論理学の体系は、記号と、その記号の並べ方の慣習の体系と云え

る。ただ、これ等体系の提供するのは、言語的行動間の、限られた反応の組み合わせに過ぎない。一般に、言語的行為は、一つの出来事であり、その場合、科学の対象となる。これを研究する科学の分野が、言語学である。

科学者の行なう論述の中には、その中で使われる言語形式が、その用法を規定する科学的約束によって支えられた意味以外の意味をもたないと云うものもある。この様な論述は、外界については、語るところがないので間違いを犯す余地はないと云える。これに反して、外界の意味を取り入れると、誤りを犯す危険がある。1個人、又は、社会に独特な行為が、科学に於ける研究の対象となり、他のものと同様に、観察される事があるが、しかし、こうしたものは、科学的過程の1部となる事はない。科学は、言語以外の点で、公共的な活動であるが、言語的立場から考えても、又、公共的活動である。

科学的論述に加わる者は、慣習と訓練により、意味の中の個人的要素をすべて無視する様になる。

科学の世界では、言語の違う論文が、幾つあっても、結果は同一となる。この様に科学の世界で、結果が一致すると云う事を考えると、言語相互間の相違は、伝達に対して、多少の障害になるが、結果に対しては、問題にならない。ここに、科学的論述は、翻訳可能と云えるのである。

科学的論述が、翻訳可能であるとする、形式上の方言が、いくつあっても、その1つ1つが、科学の研究成果を、一様に解する事が出来る。ただ、この様な方言の性格は、科学的論述のもつ基本的な言語の型により、制限を受ける様になる。しかし、或る言語形式が、非常に便利であるので科学的論述はその方面に傾きがちである。即ち、数学と形式論理学の有する型の方に、傾いているのである。

科学的論述で使われる文は、1つの平叙体の統語群か、或は、いくつか

の平叙体の統語群が、等位の関係に置かれたものから成り立っている。科学的論述の、初めにおかれる推論は、排除の過程であると云える。

いくつかの文は、ある他の文を、排除しているが、又同時に、ある他の文の否定を、包含しているのである。文が、包含的なものと、排除的なものに、2分されるのは、言語が、本来もっている性格による。

文学を研究する場合、その社会の機構や、伝統を調べたり、又独創的才能をもった個人の心理を、調べたりする。しかし、科学との関係に於て考える場合、言語が特殊化されるのは、如何なる形式が、反応を伝達するのに都合がよいか、又、形式自体を、精密なものに変えて行くには、どんな形式がよいか、と云う様な事を、目標にして行なわれる。

科学的言語を批評したり、理論づけたりするのは、論理学の仕事である。論理学は、人々が、ある型の論述を、いかに進めるかを、観察するものである故、言語学と密接な関係にある科学の一部門である。これに対し言語形式を発明し、これをあやつる事は、科学ではなく、1つの技術である。この中に、数学が入って来る。

E, 言語と思考について

先づ、アメリカの言語学者エドワード・サピア (E. Sapir) は、次の様に述べている。「言語は、社会的実在を、理解する手引きである。社会の諸問題、諸過程に関する人の思考を、大きく支配している。人は、社会で表現の手段として使われている特定言語に、大きく支配され、生活している。

人が、生活して言語とは無関係に、実在世界に適応するとか、言語は、意志の伝達や、思考と云う問題を、解決するための方便に過ぎない、と云う考え方は、誤りである。実在世界は、かなりの程度、無意識的に、人々

の言語習慣の上につくられる。知覚と云う様な単純な行為さえも、言葉と云う社会的ボタンに左右される。人々が、見たり、聞いたりする様に体験しているのは、社会の言語習慣が、人々に、ある種の解釈を、選択させるためである。」

常識的見解によると、思想は、もの云う行為とは独立した、思考と云う過程に於て形づくられる。言葉は、こうして出来上った思考を、表現する為の手段に過ぎない。何れの国の言語を用いても、思想そのものには、変化が生じない。それぞれの言語には、それぞれの文法がある。しかし、文法は、単に言語の使用に関する社会的約束事であって、発話と云う行為は理性的な思考によって定まる。こうした常識的見解に対し、言語学者ホワーフは、次の様に述べている。「同一の自然現象を、観察したとしても、観察者の言語的背景が、同じであるか、或は、何等かの方法で、調整が行なわれていなかったならば、同一の世界像を、持つには至らない。」この理論を言語的相対性原理と呼んだ。

自然界の物の属性は、多くは連続的であるが、それを言語で言い表わす場合には、不連続なものとして扱うのである。例えば虹の色について考えてみると、実際には、色は、なだらかに変化して居り、青と云っても、はっきり、何処から何処迄と区別出来ない。しかし、青と云う時は、他の色から区別して、即ち、不連続的に扱っているのである。

しかし、どの様にして、不連続に区切るかは、各国の言語により違って来る。即ち、符号化のしかたは、言語が変れば、変ることが多い。この符号化に於ては、個々の符号は諸符号の全体系の中で、相対的にその特性を明らかにしていると云う事である。

又、古くからある言葉でも、昔と今とでは、意味が変わってしまった場合が、多くある。例えば、「うつくし」と云う言葉は、現在は、広く美を表

わしているが、万葉集では、父母、妻子、夫婦、近人等に対する親密な、肉親的愛情の表現であったと言われる。それが、平安時代になると、小さい、可憐なものに対する好み、愛情を意味する様になり、現在の「かわいらしい」と云う言葉に、近くなって来る。こうした事実は、行動の上でのカテゴリーは、別の所で出来ていて、言葉は、横すべりにずれて、新しいカテゴリーを示す様になると考えられる。

F、言語と文化形式について

ラドーによると、文化を構成する行動型は、形式、意味、分布を、持つ事になる。一例として、スペインの闘牛を考えてみると、闘牛は、スペインでは、スポーツであり、娯楽であり、牡牛の野獸的な力に対する人の技巧の勝利、勇敢さ等の意味を持つのである。又、闘牛には、特定のシーズン、特定の日に、特定の場所で行なわれると云う分布がある。

又、一般的形式として、刀と赤いマントで武装した男が、闘牛に挑戦しこれを殺す事になっている。

これ等の形式、意味、分布等の総体が、スペイン文化に於ける闘牛を、形づくっている。「闘牛」と云う名称が、これを形づくるのではない。ラドーによると、アメリカ人は、武装した男が、無防備な牡牛を殺す残酷なものとして、受け取るであろう。と、云っている。スペイン文化では、人と牡牛とを、全く別な類に分けているが、アメリカ文化では、人と牡牛とを、同じ類に入るものとして考え、互角に戦う機会を、与えられるべきであると考えている。即ち、両文化では、人と牡牛の位置するカテゴリーが違うために、アメリカの旅行者に、「残酷」と云う感を抱かせるのである。即ち、文化内部に於ける行動の型は、言語とは、一応独立をしているのである。二つの文化に於て、同じ意味が、異なった形式と連合する時、

もう一つの種類の障害点を予期する事が出来る。習得した文化内で、行為しようと試みる外国人は、意味を達成するために、自分自身の文化の形式を選び、異なった形式が、必要とされている事実を、見逃しやすいのである。又、ある文化の構成員は、物事を行う方法や、周囲の世界を理解する方法、及び、自分達の形式や意味が、正しいものであると仮定する事実更に障害を、予期せねばならない。そこで、他の文化が、他の形式や、他の意味を用いると、それは、正しくないと考える。即ち、他の文化が別の文化から、ある行動型を採用すると、真似された前の文化は、何か良い、正しい事が、行われているように感じるのである。

次に、同じ形式と、同じ意味を持つ型が、異なった分布を示す時、外国文化の習得には障害がある。外国文化の観察者は、観察している文化に於けるある型の分布は、彼自身の文化に於けるものと、同じであると仮定しそこで1変異形における或る特性が、より多く、或は、より少なく、或は欠如している事に気づくと、彼は、自分の観察が、すべての変異形に適用されるかのように、観察を一般化する。

ある言語の単語や、言語形式は、別の言語の単語や、言語形式と、同じものを意味するものでなく、その言語を、母国語として用いている人々の特定な、具体的な経験を意味するものである。

言語教育との関連に於て論議される文化材料の多くは、ある国民の外的な文化、即ち、歴史、地理、教育組織、宗教団体、社会的階級、音楽、芸術、文学等の特性に、関係するものである。

二つの異なる社会にあっては、外見的行動の所作が、非常に異なる文化的、構造的価値を持つ場合が多分にある。したがって、ある国民の特定慣習を、少しでも理解しようとするなら、外的文化の構造型を、探し出そうとする努力が、必要になる。この事に関して、サピア (Sapir) は、次の様

に述べている。「ある個人が、何をしているかと云う事は、もしも、社会的慣習が、我々の生れた瞬間から、常に、我々の心に、しらずしらずのうちに、しみこんでいる本来きままな解釈様式を、我々が暗黙のうちに、うけいれているのでない限り、これを明言する事は出来ない。土着民の団が、或る活動に従事している際、その行為を克明に報告する場合、彼が記者であるなら、彼が、見たり、聞いたりしたものを、はなやかに記述する事は、出来るかも知れない。しかし、自分の報告を、土着民自身に理解され、受け入れられるような表現で述べる事は、至難である。彼は、あらゆる種類の歪曲と云う間違いをするであろう。土着民達があたりまえの、重要性をもつ行動と考えている事を、特に興味あるものと思い、又一連の行為の中で、その行動全体に、慣習的有意性を与えるものと考えられている点を、全く見逃してしまうであろう。」

最もよく選択された文化的材料でも、これを言語教育に、効果的に利用すると云う段になると、種々、困難な問題をひきおこす。異なる文化的背景をもつ人々が、新しい経験の評価様式を、共感的に、理解する事が出来るように扱う事は、決して簡単ではないのである。 (1978.10)

Bibliography:

- C. C. Fries,: American Linguistics and the Teaching of English, 1955.
 L. Bloomfield,: Language, 1933.
 Beritl Malmberg,: Linguistic Barriers to Communication in the Modern World, 1960.
 " " : Sproaket och människan, stockholm, 1970
 Lado, Robert,: Annotated Bibliography for Teachers of English as a Foreign Language,
 " " : Linguistics Across Culutures Applied Linguistics for Language Teachers, Translated and Annotated by Akiko Ueda, 1963

E. Sapir: The status of Linguistics as a science, 1929

B. L. Whort; Science and Linguistics, 1956

H. A. Gleason; An Introduction to Descriptive Linguistics, 1961

Bertil Malmberg: Language and Man (translated by S. Okazaki,)

Tokyo, 1972

教育学全集 ⑤ (小学館) 1975